

DNA鑑定の威力(本文5~11ページ)

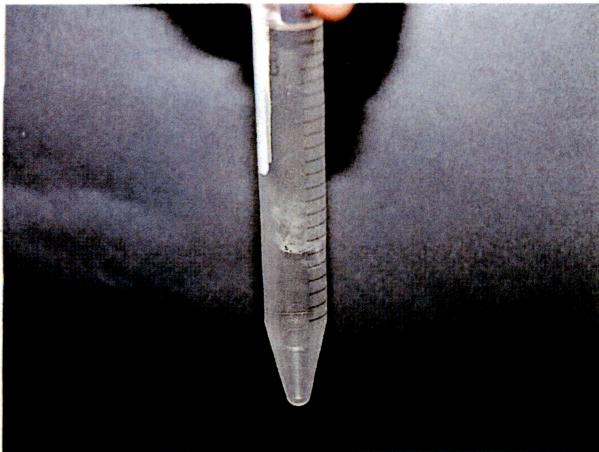


写真1 抹梢血10mlから抽出したDNA(混濁している部分)

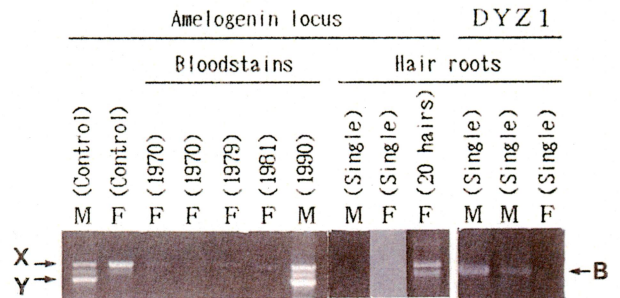


写真4 Amelogenin 遺伝子による男女の判定例

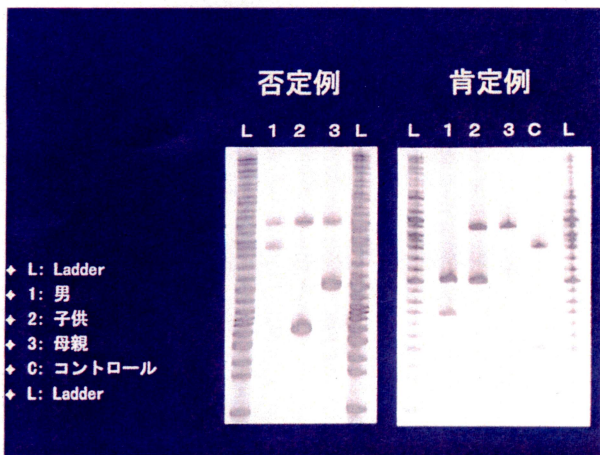


写真2 シングルローカスによる親子鑑定の肯定例、否定例

HLA-DQ α 部位

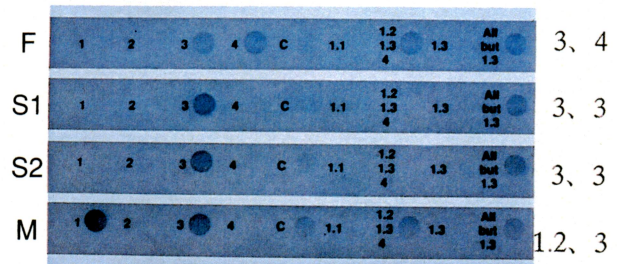
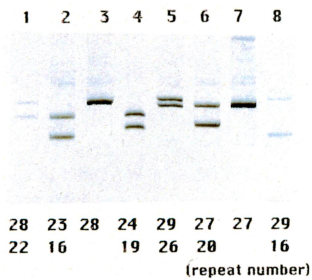
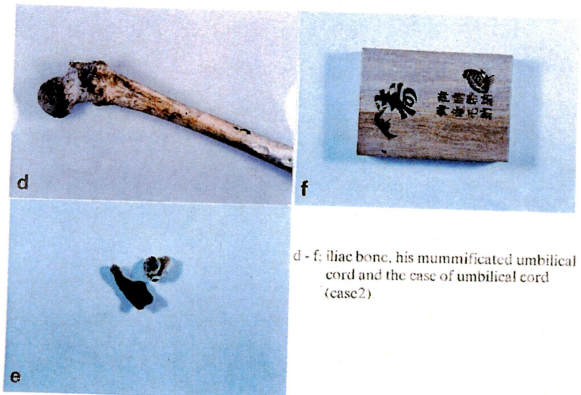


写真5 HLA-DQ α 部位における親子鑑定
(F:男、S1:子供1、S2:子供2、M:母)



VNTR (D1S80) 部位による個人識別例

写真3 D1S80のDNA多型例(1:22・28型、2:16・23型など)



d - f: iliac bone, his mummified umbilical cord and the case of umbilical cord (case2)

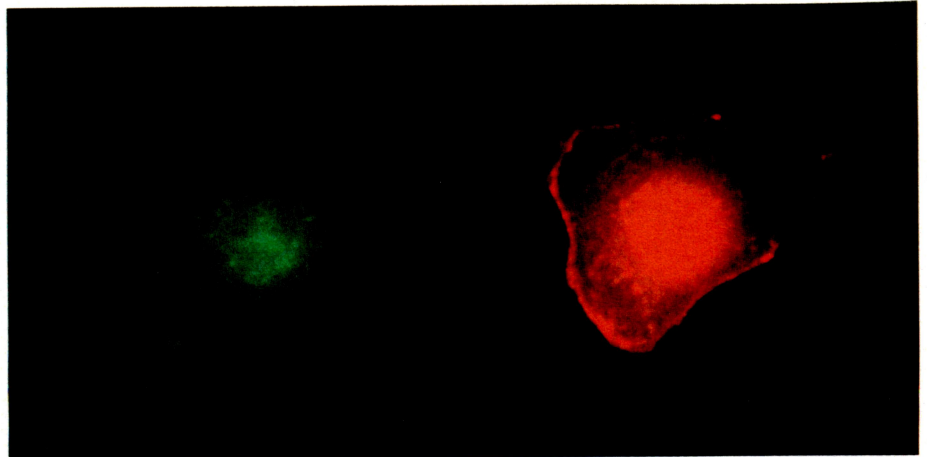
写真6 大腿骨および臍帯

Metal Biologyとその臨床応用(本文12~19ページ)

写真右

GFP・HFE融合遺伝子を導入した肝癌細胞HFLにおけるHFE(左)とトランスフェリン受容体(右)の細胞内局在の蛍光顕微鏡写真

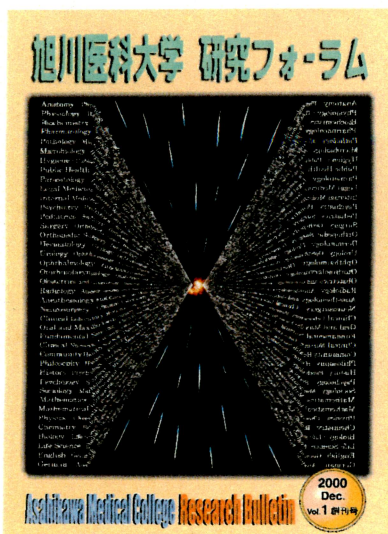
原発性ヘモクロマトーシス遺伝子産物HFEとトランスフェリン受容体は、細胞表面と核周囲のエンドソームに一致して局在する。



写真上 カンファレンスルーム

本学遠隔医療センター (本文20~25ページ)

写真下 研修室



表紙を担当させていただくことになりました。力不足ですが、チャレンジしてみたいと思います。創刊号ということで、宇宙的なスケール感の中に旭川医科大学全講座を配してみました。中央のビッグバン(画像:オリオンKL領域、国立天文台提供)から始まったScience(左文字列)が、人間のsensible(知覚可能な実時間空間)な領域であるとしたならば、未だinsensible(知覚不能な虚時間空間)な領域(右文字列)も確かに存在しているであろうこと、本学の新千年期(new millennium)における発展を祈り、イメージ化してみました。これが今後どのように様相を変えていくか、ご覧頂ければと思います。

整形外科学講座 今井 充